様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：１１２０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２０００６

研究課題名（和文）道徳の形而上学的基層の批判的検討―ミニマルな道徳形而上学の再構築のために

研究課題名（英文）Critical investigation of the metaphysical basis of Morals; for the reconstruction of minimal metaphysics of morals

研究代表者
宇佐美　公生（USAMI, KOSEI）

岩手大学・教育学部・教授

研究者番号：３０１８３７５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：自然主義者による道徳の形而上学的概念批判の意義を認めつつも、彼らによる道徳生成のシナリオを分析・再評価することで、現代の自然主義者でさえ「よい生」を構想せざるを得ない限りで、「尊厳」や「目的自体」などの形而上学的概念や価値については依然として尊重する傾向にあることが確認できた。また道徳の形而上学的概念は幻想的でありつつも、道徳的主体の組織化を可能にする次元の創発に関わっていることが脳科学者の研究によって示されたことで、カントが人間の宿命とした形而上学の問題が、実は自然の内に根を持っていて、今後も実践の文脈においては、単純に消去することができず、有意義な課題であり続けることが確認された。

研究成果の概要（英文）： Through the research of neuroscience, animal ecology and evolutionary biology, the naturalistic understanding of morals are progressing. According to such understanding, naturalists are criticizing the metaphysical concept of morals as injurious. I have admitted the significance of their critique of metaphysical concepts, but also have analyzed and reevaluated their scenario concerning the generation of morality, and confirmed that even the moral naturalist also tended to respect the metaphysical concepts or values such as "dignity " and " purpose itself ", when conceiving of the “ Good life".
Also, it has been shown by a neuroscientist that the metaphysical moral concepts are certainly fictional, but they also affect the emergence of a new mental dimension, which constitutes the moral subject. And this means that the problem of metaphysics, which Kant had investigated, is based on human nature and still remains significant in the practical context.

研究分野：倫理学

キーワード：道徳の基礎　形而上学批判　自然主義　実践理性　道徳脳　創発

１．研究開始当初の背景

脳神経科学研究による共感機能の解明、価値意識の認知科学的研究、動物生態学やゲーム理論を駆使した動物の利他・互恵・制裁関係の解明などを基礎にして、進化論的倫理学や脳神経倫理学をはじめとする自然主義的倫理学が近年急速な発展を見せている。それにともなって、これまでの倫理学が抱え込み、基礎に据えてきた形而上学的要素は脱色され、自然の諸過程へと還元されるか、幻想として消去される傾向にあるように見受けられる。とりわけ脳神経科学等の研究により、人間の道徳的判断や動機づけに占める感情の重要度が明らかになるにつれて、D・ヒュームやアダム・スミス等の道徳感情論が再評価される一方で、道徳での理性の働きを重視するカントの道徳理論に対してはその形而上学的基礎づけを含めて、多方面から厳しい評価がなされる傾向にある。

ところがカント自身は、『視霊者の夢』や『脳病試論』、『人間学講義』などにおいて、現代の自然主義者と見紛う姿勢で、心の諸現象の理解や病理の解釈と（エンハンスメントも含む医療や教育での）実践的応用可能性を展開してもいた。彼は自然科学の進展を背景に、実践的人間学による自然主義的な人間理解の可能性と効用を認めた上で、独断的形而上学崩壊の時の到来を語っていた。だがその一方で、『プロレゴメナ』の中で彼は「人間精神が形而上学的探求をいつか全く断念するだろうということは、我々が不純な空気を吸い込まないために、いつかむしろすっかり呼吸を止めてしまうだろうということと同様に期待することはできない」とも語っていた。そして自然科学の知見を前提しながらも、それを越えて道徳にとって許容できる形而上学的根拠づけをカントは模索していた。そのカントが直面していた形而上学の危機と同様な状況が、現代の我々の前にも広がっていると言える。

研究代表者は、このような状況認識を前提に、カントが試みた「道徳形而上学の基礎づけ」を、現代メタ倫理学でいう道徳的「内在主義」の正当化として捉え直した上で、「内在主義」が抱える独断性などの諸課題への回答を提示する試みとして、カントの思索を分析してきた。そして適法性を反省的に吟味する視点を「道徳の理念性」として際立たせることが、内在主義の課題を克服しうる可能性を拓くことを示してきた。しかし道徳が「理念」に留まるだけでは、自然的諸機能との間での新たな「弁証論」を引き起こしかねず、今日の自然主義的研究の諸成果を前に、理性の事実の上に胡坐をかいて警鐘を鳴らすだけでなく、道徳の形而上学的側面の実践的意義を「批判的に」洗い直す必要があると考えるに至った。

２．研究の目的

本研究の申請時には、自然主義による道徳の形而上学概念に対する批判の意義を確認しながら、改めて道徳の形而上学的基層を洗い出してその実践的意義を批判的に検討することを通して、現代における道徳のミニマルな形而上学的基盤を構想することを目的として設定した。そしてこの様な目的を達成するための中間的な課題を設定した。それらは以下の通りである。

(1)、近代の自然主義的立場に立つ哲学者たちがその道徳哲学において、「自由意志」「人格」などの実践に関連した形而上学的概念に対し、どのような位置づけや評価を与えてきたかを整理した上で、それらの概念が有する意義を理性主義などの伝統的道徳哲学が与えてきた意義と比較する。

(2)、脳神経科学や道徳心理学、動物生態学などの諸科学における研究成果をふまえ

た上で、それらの成果を背景にした現代の自然主義者による、形而上学的概念に対する消去主義的ないし還元主義的処遇が、様々な倫理的問題に対してどのような影響を及ぼすことになるかを検討する。とりわけ、今日ある種の自然主義では、自由意志や人格などの概念の幻想性が強調され、それらの概念の無効性や消去可能性が示唆される一方で、道徳的な逸脱状況や責任の問題に対しては功利主義的な視点からの対処が提案されたりもするが、そのような形而上学的概念の消去や還元などの扱いが、社会関係にもたらす道徳面での意義と課題を明らかにする。

(3)、上記の二つの課題に答えつつ、応用倫理的課題も含めた道徳的課題について、自然主義者でさえも暗黙のうちに前提せざるを得ない道徳の形而上学的概念を考えることができるか、考え得るとすればそれはどのような概念なのかを検討・吟味する。

３．研究の方法

上記の目的に対応して、採用した研究方法は、以下のとおりである。(1)文献解釈を中心に思想史的な比較研究。(2)道徳に関わる諸活動（判断、動機づけ、利他的行為等）の自然的基盤に関する脳神経科学や道徳心理学、動物生態学などによる研究成果を整理し、それらの成果が示唆する論点の意味を解釈しながら、それらが道徳をめぐる既存の議論（道徳の基礎づけや道徳判断の意義づけ）に対してどのような影響を及ぼすと考えられるかを考察し検討する研究。(3)自然主義者による形而上学的概念の消去や還元の試みにあってもなお生き残る、あるいは潜在的に参照される可能性のある形而上学的概念にはどのようなものがあるかを具体的な倫理的課題に即して検討する研究。これらの研究の殆どが資料の読解と解釈に基づく考察であって、道徳に関する直接的な実験や調査による研究方法を採ることはできなかった。ただし、精神医学や心理学分野の専門家から、近年の脳神経科学や心理学の研究成果に基づく臨床的・実践的な対応の変化や課題に関する専門的知見をうかがい、考察の参考にすることはできた。

(1)の思想史的な比較研究では、「理性は情念の奴隷である」という言葉で有名なヒュームの自然主義的道徳理論と、純粋実践理性による動機づけの可能性を語るカントの形而上学的道徳理論とを対比ながら、その対立を内在主義と外在主義という現代のメタ倫理学の図式を用いて整理･再構成し、感情ないし情念による動機づけの必然性を語るヒューム主義に抗して、理性が行為を動機づけうるとする複数の議論の根拠を比較検討した。但し理性による動機づけとは、さしあたり目的への欲求の存在を前提した道具的実践理性のそれであり、純粋実践理性のみによる動機づけの力については、十分に明らかにすることはできなかった。

(2)の脳神経科学や道徳心理学、進化生物学、動物生態学等による道徳の起源や、道徳脳の機能をめぐる研究成果をふまえた研究では、道徳が自然（本性）に根拠を持っている可能性と、他方で道徳の形而上学的概念が幻想であって、場合によっては消去しうる可能性とが吟味された。たしかに利他的行為もその起源を遡れば、進化を生き延びた遺伝形質にその源泉の一つを求めることができるし、公正さへの関心なども類人猿の行動の観察で、本性的に備わっていると考えられている。さらに特殊な道徳的判断の欠陥事例に関する脳科学的な観察からは、道徳性の欠如と重要な関係にあるのが理性よりもむしろ感情を司る部分の働きであることから、理性に基づく形而上学的な概念の機能についての否定的評価なども引き出されている。しかしその一方で、そ

のようにして解明された自然的基盤は、言わば道徳性の質料的条件ではあっても、そのままで直ちに人間にとっての道徳の根拠になるとは言えない。そこに後づけ的に理由が加えられ、上書きされていることもあり、自然的基盤の上に、新たな形而上学的概念が人為的に創り出されなければならなかった可能性も否定されていない。そして脳科学者によれば、実際、そのような理由を創り出し（捏造し）てしまうインタープリターとしての働きが左脳において確認されている。むしろ歴史的には、人間の「権利」や「尊厳」といった形而上学的概念が編み出され、既存の自然的基盤の上に新たな概念のネットワークが創出されるとともに、別のレベルの道徳的次元が新たな構造で出現、創発したのだと考えることができる。だが自然主義者の中には、たとえば自由意志のような伝統的な形而上学的概念を幻想であるが社会生活に有用なフィクションとして容認するだけには留まらず、積極的に消去しようとする者もいる。たしかにそうした消去によっても功利主義的考え方や徳倫理の概念を残す限り、道徳的当為や価値の世界までも消滅してしまうことにはならない。しかしそれが却って自然に根ざした人間の道徳本性との確執を招きかねないこと、道徳的責任の領域が治療の領域に変質してしまう可能性が高まるなど、新たな道徳的課題を呼び込むことになる。しかも、例えば自らの「自由」の有効性を信じている人同士による自由に役目を果たせる社会の方が、自由の有効性を信じていない社会よりもよい結果を招く可能性が高いことは、すでに実験によって検証されている。

(3)「人格」「目的自体」「普遍化可能性」など道徳の形而上学的概念を打ち立てることで創り出され保護されてきた価値領域（人権や社会的自由）というものがあり、それらの根拠は、なるほど新しい応用倫理的問題を前にして吟味に晒されたり、批判されることもある。それでもそれらは既に道徳的概念間でネットワークを成していて、組み替えられることはあっても簡単に消去できないものとなっているだけでなく、たとえば「目的自体」や「尊厳」のような概念については、自然主義者によっても倫理的関係を考える上で有意義なものとして認められている。

４．研究成果

道徳的能力をめぐる脳神経科学や道徳心理学、さらには道徳の源泉をめぐる進化生物学や動物生態学などの研究成果によって、道徳の形而上学的概念の幻想性や虚構性が浮き彫りにされつつあることはたしかであるが、しかしそれらの概念は他方で、人間に特有の理由を求める脳の働き（インタープリター）から創発した幻想（理念）とも考えられる。その意味で間接的に自然に根を持ってはいるが、しかし自然（脳や遺伝子）の原理的要素へと還元することはできない独自の意味の次元を形成している。そしてそのことの先駆的な理解を、無制約的なものを求める理性の自然的傾向によって創り出された概念としての「目的自体」や「普遍化可能性」を指摘したカントの考察にみることができる。しかもそれらの概念は、人権や公正さという形で、社会における正義の概念の基盤を支え、自然主義者ですらその有意義性を認めざるを得ないものとなっていることを、この研究を通して確認することができた。但し、それらの概念の内で何がより基礎的で、何が派生的と位置づけられるかは、道徳的な「よさ」をめぐる立場によって一様ではなく、概念間の体系的な関係を整理し再構築するまでには到らなかったことを付け加えておく。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

① 宇佐美公生、「道徳の自然的基盤の検討のためのノート(2)」、『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』、査読無、第 14 号、2015、257-267

② 宇佐美公生「道具的実践理性—共同討議・趣意」、『日本カント研究』、査読無、No.15、2014、39

③ 宇佐美公生「理性に動機付けの力はあるか—道具的実践理性と純粋実践理性—」、『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』、査読無、第 13 号、2014、11〜25

④ 宇佐美公生「道徳の自然主義的基盤についての検討のためのノート」、『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』、査読無、第 12 号、2013、1〜14

⑤ 宇佐美公生「理性による『形而上学への自然的性向』に対する『批判』—道徳をめぐる感情主義と理性主義の対立を越えて—」、『思索』、査読無、第 44 号、2011、31-59

⑥ 宇佐美公生「道徳的命法の『無制約的必然性』について」、『東北哲学会年報』、査読無、27 号、2011、115〜116

〔学会発表〕（計 2 件）

① 宇佐美公生、子どものための哲学と道徳教育、岩手県教育研究ネットワーク活動交流会、2014.5.24

② 成田和信、銭谷秋生、宇佐美公生、共同討議：道具的実践理性、日本カント協会第 38 回学会、2013.11.23、早稲田大学国際会議場

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
宇佐美公生（USAMI, Kosei）
岩手大学・教育学部・教授
研究者番号：３０１８３７５０

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：